
生涯貴女を守ります

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生涯貴女を守ります

【Nコード】

N1958Z

【作者名】

亜紅亜

【あらすじ】

ある日おこった事件、特定の人物だけを狙う連続殺人だった。それはある男の逆恨みからくるものだった。その男に蘭が狙われて――？

1話

「ごめんな…蘭」

新一の悔しげな声が病室に響いた

新一の握っているシーツは引き裂かれんばかりに握られていた…

「昨夜、女子高校生が男に刃物で襲い掛かれ重傷を負う事件がありました。警察の調べでは例の連続殺人犯によるものと判明しました。

今までの被害者は共通点があり、皆死亡するまで犯行に及んでいることが分かりました」

「…怖いね。新一」

蘭は工藤邸に訪れ二人でゆったりと日曜日を過ごしているところだった。

「そうだな。俺、昨日警視庁に行ったから目暮警部に聞いてみたんだけど…

その共通点が、空手をやってる、って事なんだよ」

「っあ、あたしもじゃない!」

「ああ、空手をやっている女子高校生なら上手い、下手関係なく殺している。有段者の人も殺されちゃったからな…」

新一は悔しそうに言った

その目にはいつも犯人を追い詰めるときなどの鋭い眼差しだった

「だから蘭も気をつけろよ。犯人がこの近辺にいないとは限らないんだからな」

「うん…」

蘭は明らかに不安そうだった

「大丈夫だよ。心配すんな！お前は俺が守ってやつから！」

そう言って蘭を抱きしめた

だが、この二人は恐怖を味わうことになる

互いの優しさが互いを傷つけあうなんて、知る余地も無しで――

1話（後書き）

他にも連載あるんですが…

大丈夫です！

これは結末もう頭の中にあるんで！
明日にでも終わるかもです！！！！

2話

例の連続殺人犯のニュースを見た日から、新一と蘭は必ず登下校を共にするようになっていた

その日も学校から夕飯の食材を買うため、商店街を通りながら工藤邸へ向かっていた
さすがに町のあちこちに警官が大勢いた

新一らが歩いている商店街もそうだ

「つくつくつく…。見つけたぞ…。毛利蘭」

男は不気味に笑った

その手には空手経験者のリストが握られていた
住所から何まで。写真もついている

「まってるよ、桜。今すぐお前を貶めた悪魔達を、地獄へ落としてやるから。」

…この俺がな」

ポケットから果物ナイフを取り出し、刺す、殺すタイミングをつか
がっていた

警官の視線もはずれ、ターゲットはこちらに気付いていない
運良く一緒に居る男は俺のいる側にはいない

チャンスだ

と、足を踏み出そうとした瞬間過去がよみがえる

――もう限界だよ――！！

――なんであたしがこんなことにならなくちゃいけないの？

――助けてっ！！！！お兄ちゃん！！！！

……可愛い妹

俺は助けることが出来なかった

あいつは俺を信じて待っていたのに……！！！！

自分の無力さに目眩がした

しっかりしろ。

まだ桜を苦しめた奴は分かっている

……いや。苦しめた奴じゃなくてもいい

空手という、くだらないものをやっていた奴なら……

思い直し、ナイフを握る力を込める

今日も俺の手は桜を苦しめた奴の血で汚れる

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

どこからか声が聞こえた

オオカミのうなり声のような――腹のそこから出た声

声の先には例の連続殺人犯

警部から聞いた特徴とびつたり合致する

ナイフを持って蘭めがけて走ってくる

――ヤバイ――！！

そう思ったときには遅かった

犯人が振り翳したナイフは蘭の胸に、恐怖で動けない蘭の心臓の位置へと向けられていた

「蘭っ！！！！」

3話

もう駄目だ！
私：死ぬんだ

そう考え、目を堅く瞑った

しかし、どこにも痛みは無かった
恐る恐る目を開けてみると……

目に入ってきたのは腹から血を流した新一だった

「新一！新一い！！！」

「っち。男のほうか…。畜生！！！」

蘭の胸目掛けて振り下ろされたナイフだったが、新一が来たことにより手元が狂い腹にいったのだ
そう言って犯人は逃げていった
そんな中でも新一の腹からはとめどなく血が流れていた

「つく…。ら…蘭、大丈夫だから…」

「何が大丈夫なのよ！！！！なんで…あたしを庇ったのよ！」

「もう……んが、…くのは…だ…から」

もう言うこともはつきりしなくなっていき、終いには意識をなくしてしまった

「新一！新一！！！！！！」

もう呼びかけても返事が無い
蘭に出来ることは、救急車が来るのを待つだけだった

「新一……」

見た目より新一の傷は浅く、命に別状はないという
だが、蘭の心についた傷はそんなに簡単に癒されるものではなかった
もう蘭の耳には新一が刺されたときから、何も聞こえていなかった

「新一が私のせいで」

そのことが頭から離れなかった

「新一……ごめんね。ごめんね……私の……せいで……っ」

頬を涙がつたう

もう、苦しかった

新一が自分のために怪我をしたり、危険にさらされるのが

精神的にも蘭はどん底に落ちてしまった

「ごめん……ね……」

4話

「…？」

「おお工藤君！気がついたか！」

「目暮…警部？どうしてここに」

「工藤君が刺されたと聞いて飛んできたんだよ！ああ、大事に至らなくて良かった」

新一は何かの違和感を感じた

警部の様子、少し動揺している、それに俺の目をまっすぐ見ない

蘭もいない

あいつの性格なら俺がおきるまでいるはずなのに…

「警部」

「何だね？」

「もういいですよ。かくさずに言ってください」

警部がヒュツと息を吸い込んだ

「…まったく、君にはかなわないな」

「…蘭に何かあったんですか？」

「……」

「言ってください」

警部の口から発せられた言葉は俺の思考をとめた

「蘭君は精神科にいる」

4話（後書き）

今回は短い><

5話

「精神科…？なんで……」

「…君が自分を庇って刺されたところを見てね、ショックを受けてしまったんだよ。」

命に別状は無いと工藤君の状態を聞いても、上の空だったみたいでね…」

「そんな…」

何故だ

何故だ何故だ何故だ

何で、蘭がそんな目に……！

許せない

あの犯人、捕まえて、とっちめてやる！！

そう新一が怒りに燃えていたとき、目暮の携帯がなった

「はい。目暮。っ何?! 犯人が捕まっただど?!?!」

「?!」

その場の空気が凍りついた

捕まった

蘭を、蘭の気を狂わせた犯人が

何人もの罪無き人を殺してきた犯罪者が…！

「…今は米花署に…。分かった」

「目暮警部」

「？なんだね」

「僕も行かせてください」

「なっ！？何を言つとる！君は刺されたんだぞ？！
命に別状は無いとしても！今日は安静に「警部！！」」

「お願いします」

新一はそう言い、頭を下げた

最初は渋っていた警部だが、新一の根気に負け、連れて行くことにした

取調室の前

「僕に行かせてください」

「しかし、奴が…」

「構いません」

取調室には刑事ではなく、探偵が入っていった。工藤新一が

「…さっきぶりだな」

「…生きてやがったのか」

もう二人の間には火花が散っている

「お前のせいで蘭が傷ついたんだぞ。…なぜ空手をしている人ばかり狙う」

「…妹だよ」

「妹？」

「ああ。中学1年の可愛い奴だった。生きてたら高校2年だよ。
…桜っていったな、やったこともねえのに空手部に入ったんだよ」

いきなり話し始めた犯人に新一の鋭い目が向けられていた

「周りの奴らほど上手くは無かったけど、少しずつ上達していくのが楽しそうで…楽しそうで。」

…なのに！！周りより下手な桜が初の大会で負けたのを同じ部活の奴らが…！」

話しながら、嗚咽、悔しさがあふれ出てくる

「、お前が負けたせいで学校の名が汚れた、などと罵ったんだ！！！！
…でも本当のことだから桜も反論できなかった
それからだ、桜がいじめられはじめたのは」

「そして…その年の冬に自殺したんだ!!!
俺は、桜を苦しみから救ってやれなかった! だから! 今、桜を苦しめた奴ら、空手自体を潰すんだよ!!!!」

新一は顔を伏せたまま、低い声で言った

「理由がどうであろうと、殺人はやっちゃいけない。てめえはその
いけねえ事をやったんだ！
その罪は償ってもらおう」

そっつい終わると新一は部屋を出て行った
それと入れ替わりに違う刑事が入り簡単な聴取が始まった

「…工藤君」

「蘭が傷ついたとしても、犯罪は犯しちゃいけないですよね…
でも…っ」

悔しくて仕方が無かった

ギイ

取調室のドアが開いた
犯人が連れられて出てきたのだ

「おい、工藤新一」

「…なんだよ」

「刺されたのがおめえでよかったよ」

その瞬間、新一の目が獣のような鋭い目に変わった

「蘭って奴が刺されると、おまえの悔しそうな顔も、そいつの気が可笑しくなったのもみれねえしな……！」

ギャハハハハと笑い出した
そして、両脇にいた刑事を振り切ると懷に忍ばせていたナイフを取り出し新一に向かってきた

振り上げた

しかし――

新一がナイフを奪い取った

「形勢逆転ってか」

新一が不敵に笑う

そして犯人を壁まで追いやり、ナイフを振り上げた

「工藤君ッ……!!」

目暮警部の声が木霊する

6話

犯人がナイフを振り上げた瞬間、俺はその手を掴みナイフを奪い取った

そのままあたらないぎりぎりの所で振り回し、壁へと追いやった

このまま頭に刺したらこいつは死ぬんだろうか

そんなことが頭を巡る

ガッ

犯人の顔の真横の壁に刺さった

「ひっ……！や、やめてくれ！や……やめろお……！！助けてくれ……！！

！
」

犯人がそう俺に叫ぶ

そんな言葉を見し、
もう一度ナイフを振り上げる

ズズズズ…

犯人が座り込んだ

背中を壁にこすり付けて

結局振り上げたナイフは壁に刺さるだけだった

「…なにが助けてくれた」

「…へ？」

「助けてくれたと？やめろだと？てめえは殺してきた人たちから同じ言葉を言われたんじゃないか！！？！！？」

「言われたさ。だからどうしたっ」

犯人は新一の気迫に押されたのか顔を引きつらせていた

「そんな言葉を見殺して、殺したんだ。

お前が味わった恐怖をお前の我儘のせいで！沢山の罪無き人が味わったんだ！

…こんなの味わわなくていいのに！殺された人だけじゃなく、その人たちの家族、大切な人まで苦しめてんだ！！！！それがわかんねえのか！！！」

犯人はさすがにうつむき、何も言わなくなった

「お前が妹さんを自殺に追いやった奴らを許せなかったように、遺族の人たちはお前を許せないはずだ」

「だから

一生かけてでも償え。もしはむかうようだったら俺が直々に地獄へ送り届けてやる」

新一の声は今までに聞いたことの無いくらい低く、怒りがこもって
いた
その中には悲しみも混じっていた…

「すみません目暮警部。壁の破損代は払います。あとで請求書回してください」

「ああ…それは構わんが…。工藤君、犯人を殺す勢いで、びっくりしたよ」

「殺そうと思いましたよ。でも、犯罪者という奴らの血でせっかく綺麗な染まっていない手を汚したくありませんから…。」

7話

”毛利蘭さま”

病室のドアにかかっているプレートに書かれた名前が、蘭がここに
いるということを示している

信じたくなかった

精神科なんて…

でも、真実から目を逸らすわけにもいかない

犯人が捕まって、目暮警部から蘭のいる病院を教えてもらったのに、
なかなか行かなかった

……こうなったのも俺のせいなのにな

いい加減ドアを開けないとこのままずっと後悔が頭の中で巡ってし
まう

…それは蘭のためにもやめよう

気持ちを入れ替えドアをノックしようと手を上げると――

ガラッ

部屋から出てきた看護婦

「あら。毛利さんのお友達？」

「あ。はい。あの、入っても大丈夫でしょうか？」

「ええ。大丈夫ですよ。…でも何言ってもあまり反応は無いですよ。ショックな出来事を目の前で見たのが原因らしいですけど…」

看護婦の言葉が黒い塊となって落ちてくる

「…蘭？」

蘭は外を見ていた。ベットにすわり

「蘭？俺だよ。新一」

「新一…ごめんね。ごめんね…」

蘭は新一を見ないで謝り続けた
そう。蘭は新一が新一だと気付いていない……

「ごめんなさい…ごめん…ね……」

「ら…蘭っ！もう謝らなくて良いから。蘭は悪くないから！全部…俺のせいだから！俺が蘭を守れなかった。ただそれだけなんだよ」

俺は蘭の手を握り祈るように言う

「ごめんね…」

「だからっ謝らないで…蘭！」

覚悟はしていた

しかし、目の当たりにすると動揺を隠せない

「っ…蘭…本当に、ごめんな…っく」

頬を一粒の雫が伝う

涙だ

その涙が蘭の手の甲に落ちる
何粒も何粒も

「っごめんな…蘭っ」

そんな俺の耳に入ってきたのは信じられない声だった

よく知っている幼馴染の、
大好きな奴の声

「
…
新
—
？」

もう謝りの言葉ではなく、俺に向けられた感情のこもった声だった

7話（後書き）

あと二話くらいで完結です！

最後までお付き合いお願いします（* ^ ^ *）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1958z/>

生涯貴女を守ります

2011年12月17日21時48分発行